みたけ遺跡

MITAKE SITE

―宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書―

2008.12

観武ヶ原開拓農協組合
盛岡市教育委員会

例　　言

1．　本書は、平成20年４月14日～６月５日にかけて実施した、みたけ遺跡の緊急発掘調査（第１次調査：施工主山岸孝至、観武ヶ原開拓農協組合）報告書である。

2．　本書の執筆編集は、盛岡市遺跡の学び館　佐々木亮二が担当した。

3．　遺構平面位置は日本測地系（旧測地系）を用い、公共座標第Ｘ系を座標変換した調査座標で表示した。

　　みたけ遺跡　　測量座標原点　　Ｘ－32,000・Ｙ＋25,300

4．　高さは標高値をそのまま使用している。

5．　土層図は堆積のしかたを重視し、線の太さを使い分けた。土層注記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛している。なお、層相の観察にあたっては、『新版標準土色帖』（１９９４小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。

6．　遺構記号は次のとおりである。

遺構：土坑	記号：RD

7．　調査および整理作業には、次の方々の協力を得た。（五十音順、敬称略）

[発掘調査・室内整理作業]

伊藤敬子、及川京子、長内理恵、嘉鎌和男、小林勢子、工藤則子、斉藤静子、佐藤和子、沢野むつ子、谷藤貴子、千葉留里子、藤村睦美、日野杉節子、細田幸美、村上美香、女鹿麗子

[発掘調査にかかる業務委託]

株式会社ラング（石器実測に係る素図および実測図作成）

8．　発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管してある。

目　　次

例　言

目　次

挿図目次・図版目次

Ⅰ．環　境……1

Ⅱ．調査内容……2

挿図　目次

第１図　みたけ遺跡の位置図 ……1

第２図　みたけ遺跡全体図 ……3

第３図　第１次調査区全体図 ……4

第４図　ＲＤ001～005土坑 ……5

第５図　遺物包含層出土土器(1) ……8

第６図　遺物包含層出土土器(2) ……9

第７図　遺物包含層出土石器(1) ……10

第８図　遺物包含層出土石器(2) ……11

第９図　遺物包含層出土石器(3) ……12

第10図　遺物包含層出土石器(4) ……13

図版　目次

第１図版　調査区全景……16

第２図版　ＲＤ001～005土坑 ……17

第３図版　包含層断面、遺物包含層出土土器(1) …18

第４図版　遺物包含層出土土器(2)・石器(1) ……19

第５図版　遺物包含層出土石器(2)・(3)・(4) ……20

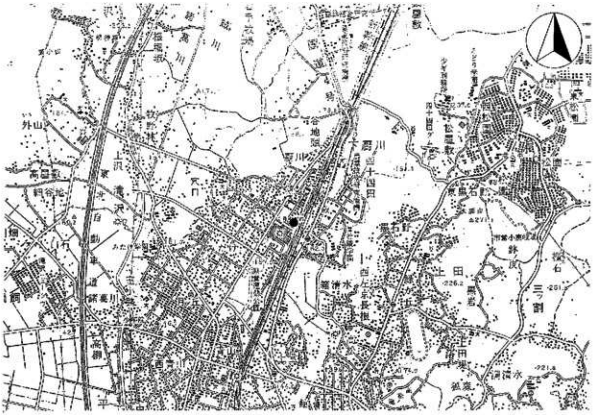
Ⅰ．環境

1．遺跡の環境

遺跡の位置　みたけ遺跡は、盛岡市街地より北西５kmに所在するJGR厨川駅の西側に位置している。遺跡の現況は牧草地であるが、周辺は宅地化が進んでいる。

地形・地質　盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈を擁し、北西には岩手山（2,038m）を望む。中央の北上平野には東北一の大河である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、東西の地形の様相は大きく異なる。また、岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地質・地形に大きく影響を及ぼしている。

盛岡市北部には、岩手山を起源とする大石渡岩屑なだれ堆積物（滝沢泥流）を基盤とした、火山灰砂台地である滝沢台地が広がっている。みたけ遺跡は滝沢台地の東縁、北上川西岸に程近い場所に立地している。滝沢台地上部は厚い火山灰層で覆われており、下層より外山火山灰・淡民火山灰・分火山灰が堆積する。遺構・遺物が確認されるのは、最上部の堆積物となる分火山灰層中からであり、主に岩手山・秋田駒ケ岳に噴出起源を持つ火山灰で構成される。みたけ遺跡の基本層位もこの分火山灰によって構成されている。



第１図　みたけ遺跡の位置図（1：50,000）

Ⅱ．調査内容

1．平成20年度の調査

調査経過　今回の調査は、土地所有者より所有地において宅地造成したい旨の事前協議があり、発掘届が提出された。調査対象範囲は、みたけ遺跡のほぼ全域にわたり（14,488㎡）、協議を受けて平成18年11月22・24日にトレンチによる試掘調査を行った。その結果、縄文時代の土坑および遺物包含層が確認され、工事着手前の緊急発掘調査が必要となった。本調査は施工主と協定書を締結し、盛岡市教育委員会が行った。調査期間は平成20年４月14日～６月５日で、調査範囲は試掘調査で遺構が確認された2,300㎡を対象とした。

2．遺構の検出状況

みたけ遺跡第１次調査区は遺跡内のやや北よりに位置し、東から西にかけての緩やかな斜面となっている。その比高差は約３ｍをはかり、標高値は164.000～161.000ｍである。

発掘調査で確認された層序（写真図版第2図）はⅠ層（表土。褐灰色土。層厚0.20～0.30ｍ）、Ⅱ層（主に斜面に堆積している黒～黒褐色土。層厚0.10～0.40ｍ）、Ⅲ層（スコリア粒を含む暗褐色土。層厚0.20～0.30ｍ）、Ⅳ層（スコリア粒を含む褐色土。層厚0.20～0.40ｍ）の順で確認された。

検出遺構　確認された遺構は、縄文時代の陥し穴５基と近現代の炭窯跡と考えられる隅丸長方形の竪穴状遺構である。また、調査区北東側の平坦面から、縄文時代早期中葉～前期初頭の遺物包含層が確認されている。

3．縄文時代の遺構

ＲＤ００１土坑（第４図）

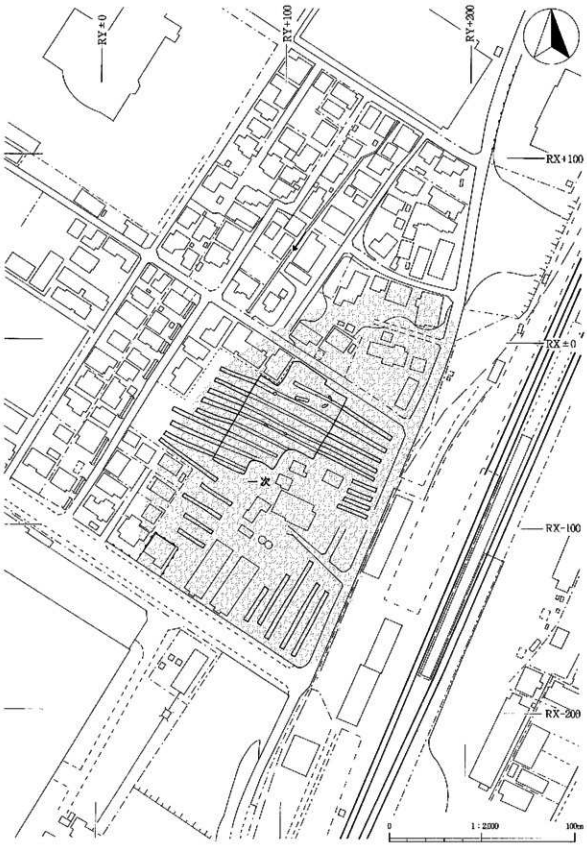
時　期　縄文時代　　**平面形**　楕状　　**重複関係**　なし　　**掘込面**　削平

検出面　Ⅱa層上面　　**規　模**　長軸上端3.65ｍ・下端2.98ｍ、短軸上端1.06ｍ・下端0.08ｍ

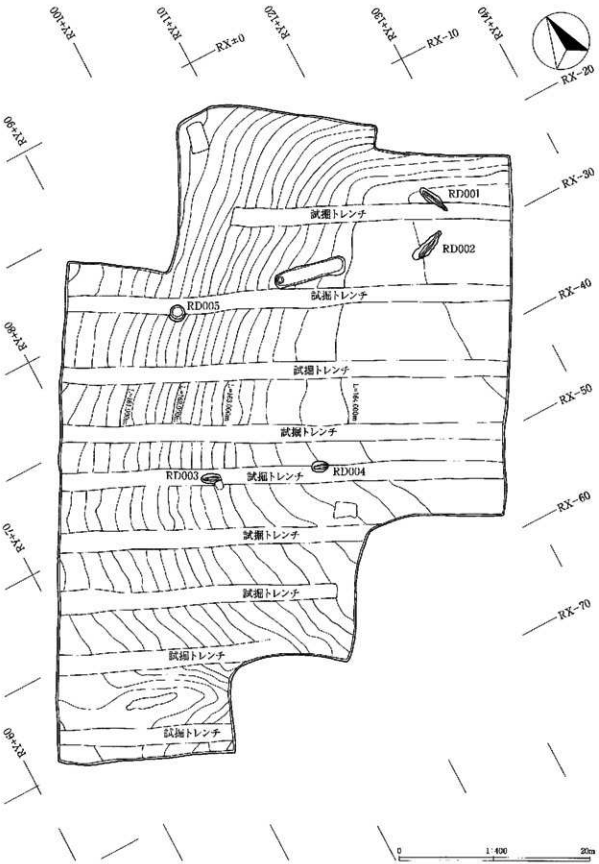
埋　土　自然堆積によるものである。Ａ～Ｄ層に大別される。各層ともスコリア粒が混入する。
Ａ層―黒色～黒褐色土を主体とする層で、粒状の暗褐色土を少量含む。３層に細分される。
Ｂ層―黒褐色土を主体とする層で、粒状の暗褐色土をやや多量に含む。３層に細分される。
Ｃ層―暗褐色土を主体とする層で、塊状の褐色土をやや多量に含む。

壁の状態　ほぼ直壁で中ほどからやや緩やかに立ち上がる。深さは1.48ｍをはかる。

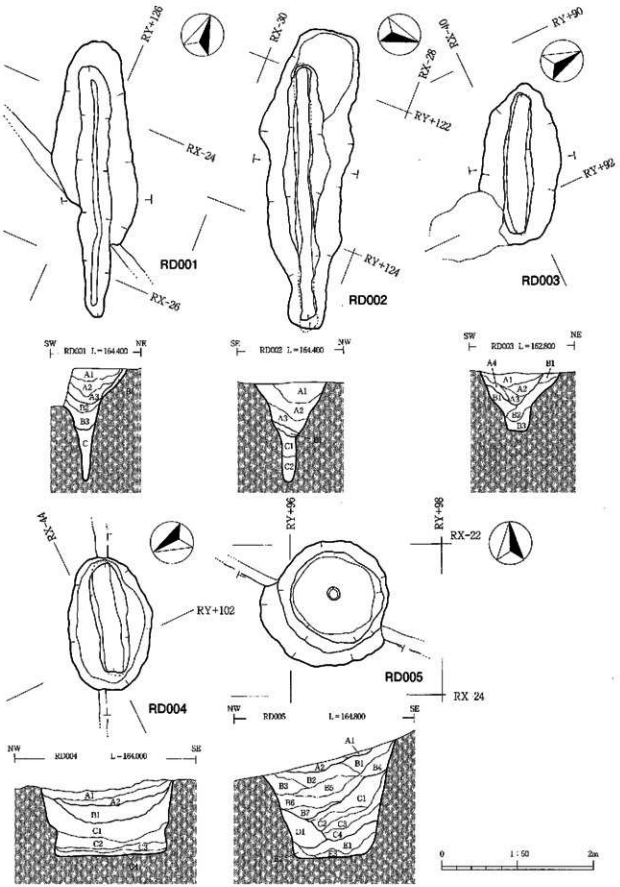
遺　物　なし



第２図　みたけ遺跡全体図



第３図　第１次調査区全体図



第4図　ＲＤ００１～００５土坑

ＲＤ００２土坑（第４図）

時　期　縄文時代　　**平面形**　溝状　　**重複関係**　なし　　**掘込面**　削平

検出面　Ⅲｂ層上面　　**規　模**　長軸上端4.02m・下端3.08m、短軸上端0.98m・下端0.12m

埋　土　自然堆積によるものである。Ａ～Ｃ層に大別される。各層とも少量のスコリア粒が混入する。

Ａ層―黒褐色土を主体とする層で、粒～小塊状の暗褐色土を少量含む。３層に細分される。

Ｂ層―黄褐色土を主体とする層で、小塊状の黒褐色土を少量含む。

Ｃ層―黒褐色土を主体とする層で、粒～少塊状の黄褐色土をやや多量に含む。

壁の状態　ほぼ直壁で中ほどからやや緩やかに立ち上がる。深さは1.32mをはかる。　　**遺　物**　なし

ＲＤ００３土坑（第４図）

時　期　縄文時代　　**平面形**　楕円形　　**重複関係**　なし　　**掘込面**　削平

検出面　Ⅳc層　　**規　模**　長軸上端2.12m・下端1.86m、短軸上端1.04m・下端0.24m

埋　土　自然堆積によるものである。Ａ～Ｂ層に大別される。

Ａ層―黒褐色土を主体とする層で、粒～塊状の褐色土を少量含む。

Ｂ層―黄褐色土を主体とする層で、少塊状の褐色土を多量に含まれる。

壁の状態　外傾してゆるやかに立ち上がる。深さは0.72mをはかる。　　**遺　物**　なし

ＲＤ００４土坑（第４図）

時　期　縄文時代　　**平面形**　楕円形　　**重複関係**　なし　　**掘込面**　Ⅲｂ層

検出面　Ⅲｂ層　　**規　模**　長軸上端1.76m・下端0.98m、短軸上端1.12m、下端0.26m

埋　土　自然堆積によるものである。Ａ～Ｃ層に大別される。各層ともスコリア粒を少量含む。

Ａ層―黒褐色土を主体とする層で、粒～少塊状の褐色土をやや多量に含む。２層に細分される。

Ｂ層―黒色土を主体とする層で、塊状の褐色土をやや多量に含む。

Ｃ層―黒褐色土を主体とする層で、粒～少塊状の褐色土を少量含む。４層に細分される。

壁の状態　ほぼ直壁で中ほどから緩やかに立ち上がる。深さは0.98mをはかる。　　**遺　物**　なし

ＲＤ００５土坑（第４図）

時　期　縄文時代　　**平面形**　不整円形　　**重複関係**　なし　　**掘込面**　Ⅲｂ層

検出面　Ⅲｂ層　　**規　模**　上端1.72m・下端1.08m

埋　土　自然堆積によるものである。Ａ～Ｅ層に大別される。各層ともスコリア粒を含む。

Ａ層―黒褐色土を主体とする層で、粒～少塊状の暗褐色土を少量含む。２層に細分される。

Ｂ層―黒色土を主体とする層で、粒～小塊状の褐色土をやや多量に含む。７層に細分される。

Ｃ層―黒褐色土を主体とする層で、粒～少塊状の褐色土をやや多量含む。４層に細分される。

Ｄ層―黒色土を主体とする層で、塊状の褐色土をやや多量に含む。壁の崩落土である。

Ｅ層―黒褐色土を主体とする層で、粒～少塊状の黄褐色土を多量に含む。３層に細分される。

壁の状態　外傾して緩やかに立ち上がる。深さは1.54mをはかる。　　**遺　物**　なし

4．包含層出土遺物

遺物は調査区北東側の平坦面から多く出土した。出土した層はⅡ・Ⅲ層であるが特にⅢ層からの出土量が多かった。Ⅱ層は黒～黒褐色土を主体とし、しまりのある層である。平坦面では後世の削平のためほとんど残っていなかったが、斜面下部には厚く堆積していた。遺物は上面のⅡa層から出土している。Ⅲ層は暗褐色土を主体とし粒状の褐色土と少量のスコリア粒を含む層で、ややしまりのない層である。褐色土の混入の割合によって２層に細分した。

土器（第５・６図）

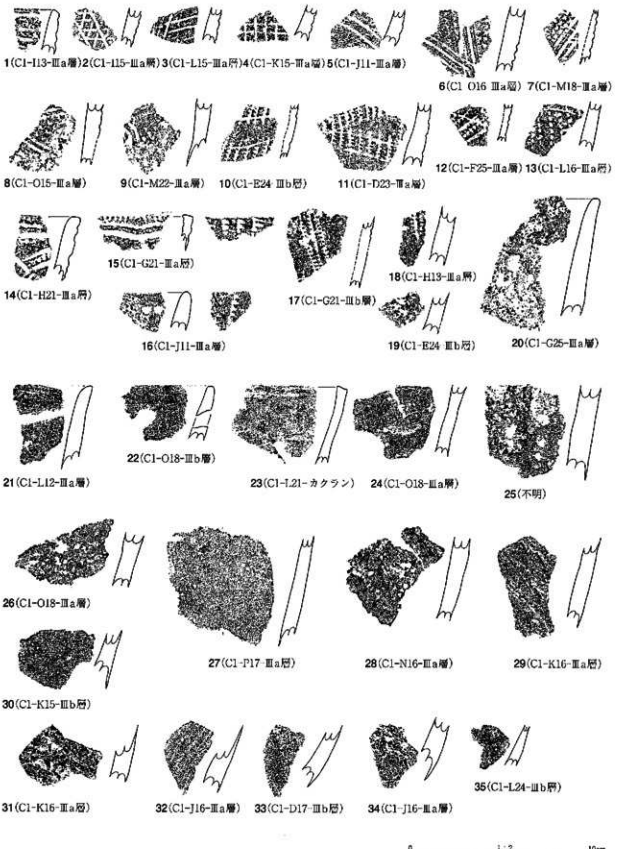
早　期　　１は単節斜縄文に横位の沈線を施した深鉢口縁部である。２～５は格子目状の沈線文を施す深鉢体部である。６～９は斜位沈線による幾何学文の間に、貝殻腹縁文を充填させる深鉢体部である。10～13は横位もしくは斜位の貝殻腹縁文を施した後に、その両端部に沿って沈線を施す深鉢体部である。14・15は刻目を付けた口縁部直下に二条の押引文を巡らせ、貝殻腹縁文を施した上に沈線による鋸歯状文を施文する深鉢口縁部である。口唇部は平坦で、内面の口縁部直下にも貝殻腹縁文を施す。16は口縁部に横位の刺突文を巡らし、内面に貝殻腹縁文を施す深鉢口縁部である。17～19は縦位の貝殻腹縁文を施す深鉢体部である。20～23は無文の深鉢口縁部である。20・22は胎土に石英砂を多く含み、21・23は赤褐色の胎土に白色の砂粒を多く含む。24～35は尖底部付近の無文帯の体部片と考えられる。丁寧なミガキが施されている。

前　期　　36～53は前期初頭の繊維土器群である。36～42は組縄縄文が施された深鉢の口縁部と体部である。43～48は羽状縄文が施された深鉢の口縁部と体部である。49・50は斜縄文が施された深鉢の体部である。51～53は不整撚糸文が施された深鉢体部である。

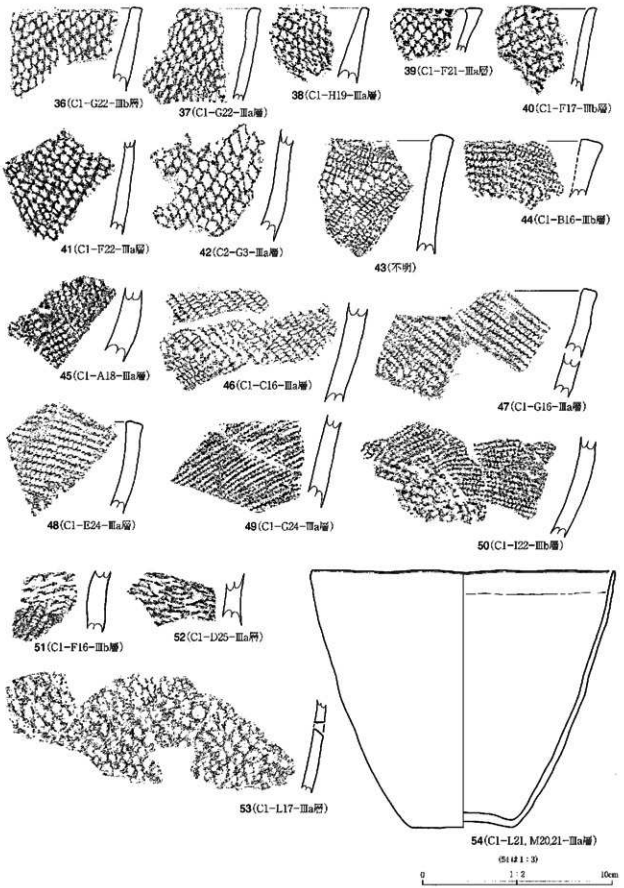
晩　期　　54は晩期の無文の鉢である。

石器（第７～10図）

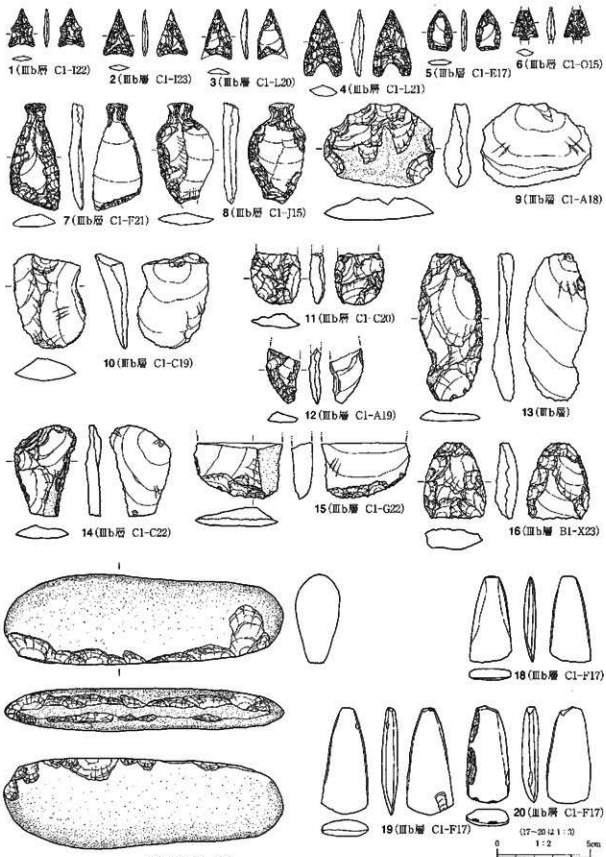
Ⅲｂ層　　１～６は石鏃である。1は凹基無茎鏃で、両側縁の中央部を突起状に作り出している。2～4は凹基無茎鏃である。2・3は両面に古い剥離痕を残す。4は抉りが深く、石材には黒曜石が使用されている。5は平基無茎鏃である両面に古い剥離痕を残す。6は凸基有茎鏃で、先端部および茎部を欠損している。7・8は縦形の石匙である。7は背面両側縁、腹面右側縁および下端部両面に調整を施している。8は主に背面左側縁、腹面左側縁に調整を施している。下端部の先端は欠損している。9～15は削器である。9は背面に原礫面を残し、主に上端部に調整を施している。10は背面右側縁に微細な剥離を施す。11は全面調整を施し、上端部を欠損している。12は背面両側縁に調整を加えている。上半部が欠損しており、縦型の石匙下部の可能性もある。13は縦長剥片の背面右側縁に主な調整を加えている。左側縁には使用による微細な剥離が認められる。14は背面両側縁に調整を加え、一部に原礫面を残す。15は剥片の両面下端部に調整を加えている。上半部は欠損している。16は両面調整を加えた石篦である。背面に使用による磨耗痕が認められる。17は半月状の敲打磨石である。側面下端部は使用により摩滅している。18～20は小型の磨製石斧である。３点とも形・大きさともに揃っており、刃部には使用による磨耗痕が認められる。石材は緑色凝灰岩であると考えられる。



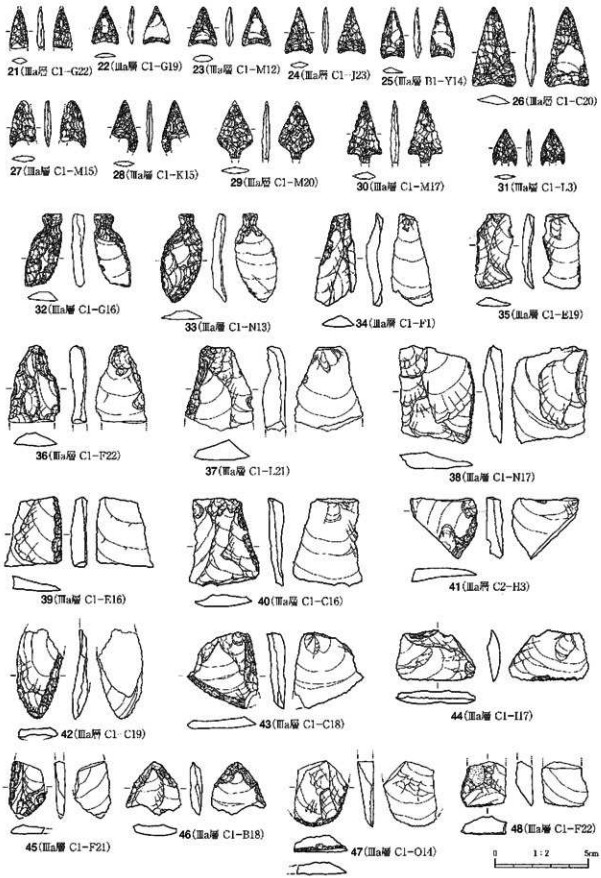
第５図　遺物包含層出土土器（１）



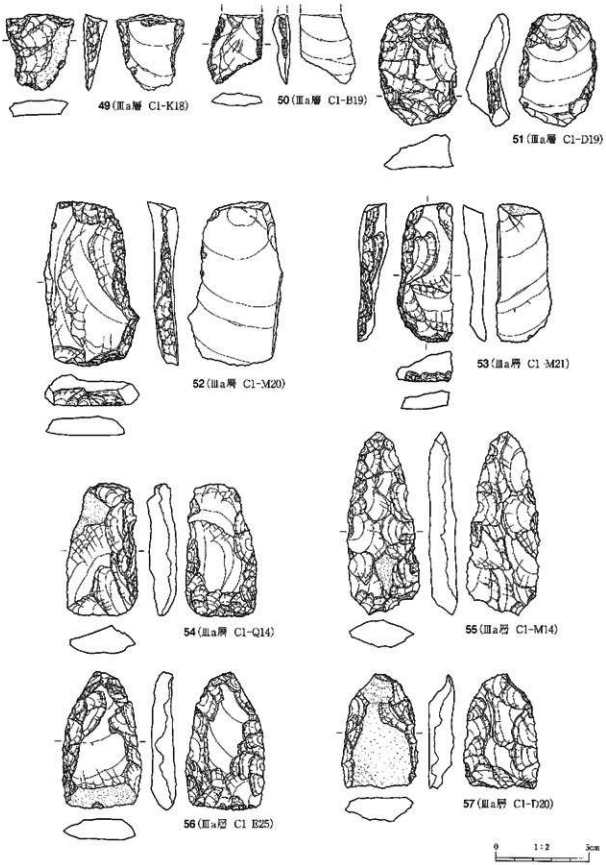
第6図　遺物包含層出土土器（2）



第7図　遺物包含層出土石器（1）

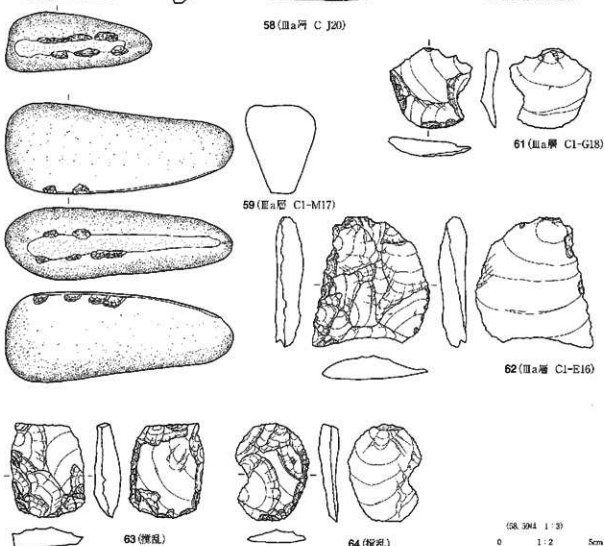


第８図　遺物包含層出土石器（2）



第９図　遺物包含層出土石器（３）

Ⅲａ層　21は先端部および基部が欠損した石鏃である。22～26は抉りの浅い凹基無茎鏃である。22は先端部を強く意識して先細るように作り上げている。23は両面に古い剥離痕を残す。24も22同様に先端部を先細るように作り上げている。25は両面に古い剥離痕を残し、先端部が欠損している。26は背面右側縁の一部に風化の度合いが異なる剥離が認められる。27は抉りに深い凹基無茎鏃であるが、先端部と脚部を欠損している。28は脚部を欠損しているが、基部の抉りが深い長脚鏃であると考えられる。29は凸基有茎鏃で先端部を欠損している。30は平基有茎鏃である。茎部が欠損し、両面にアスファルトと考えられる付着物が認められる。31は凸基有茎鏃



第10図　遺物包含層出土石器（4）

で、茎部を欠損している。32・33は縦型の石匙である。両方とも主に背面に周縁調整を施している。34～46は削器である。34・35は縦型の剥片の形を大きく変えることなく、主に背面左側縁に調整を加えている。36は背面右側縁と腹面右側縁に調整を施している。下半分は欠損している。37は背面左側縁に調整を施している。38は背面右側縁に微細な調整を施している。39は縦長剥片の上下を折り取り、背面右側縁に丁寧な調整を施している。40は素材の形を大きく変えることなく背面右側縁に調整を加えている。41は剥片の上下を折り取り、背面右側縁に調整を施している。42は原礫面が残る背面の両側縁に調整を加えている。腹面は被熱によるハジケで大きく剥落している。43は背面右側縁と下端部に調整を加え、刃部を作り出している。44は腹面下端部に微細な調整を施している。45は背面両側縁に丁寧な調整を施している。上半部は欠損している。46は両面両側縁に調整を施し、先端部を尖らしている。石鏃の未成品の可能性がある。47～53は掻器である。47は背面の周縁に微細な調整を施している。上半部が欠損しているが、円形状を呈していたと考えられる。48は背面に原礫面を残し、左側縁と下端部に調整を施す。49は腹面左側縁に急激な角度の調整を施す。背面には原礫面を残し、剥片を薄く加工するために何度も直接打撃が加えられている。50は背面両側縁、特に右側縁に急角度の調整を施している。51は両面全周縁を調整している。腹面のバルブを除去し、背面左側の剥片が厚い部分を除去しようと、基部および左側縁上部から集中的に打撃を加えている。52は縦長の厚い剥片の背面右側縁と下端部に丁寧な調整を施している。53は縦長剥片の背面に全周調整を施しているが、右半分が欠損している。54～57は石篦である。54は主に腹面両側縁および下端部に調整を施している。55は両面に周縁調整を施している。56は両面の側縁および腹面下端部に調整を施し、刃部を作り出している。57は腹面下端部に調整を施し、刃部を作り出している。58・59は敲打磨石である。断面形状が三角形を呈し、下端部には使用による摩滅痕がある。

Ⅱａ層　60は凹基無茎鏃で腹面に古い剥離痕を残す。61は背面に調整を施す削器である。右側縁には大きな抉りを入れている。62は背面全周に粗い調整を施す削器である。

遺構外　63・64は掻器である。63は腹面両側縁に丁寧な調整を施す。64は背面全周に調整を施し、円形に形を整えている。

5．まとめ

みたけ遺跡第１次調査では縄文時代の土坑５基、縄文時代早期中葉～前期初頭の遺物包含層が確認された。土坑はいずれも陥し穴状土坑と考えられる。土坑内からは出土遺物が確認されていないため、正確な時代は特定できないが、これまでの市内の発掘調査事例から縄文時代中期～晩期（約5,000～3,000年前）に属するものと考えられる。

包含層から出土した土器は、早期中葉の沈線・貝殻文系の土器群と前期初頭の繊維土器群である。近年、盛岡周辺では薬師社脇・西黒石野遺跡などで沈線・貝殻文土器群が多数出土している。今回の調査で出土した土器は僅かな量ではあるが、盛岡周辺での早期～前期の土器編年を考えるうえで貴重な成果であったといえる。

【参考文献】 盛岡市教育委員会　2007　薬師社脇遺跡　宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書

写　真　図　版

調査区全景１（南西より）

調査区全景２（東より）

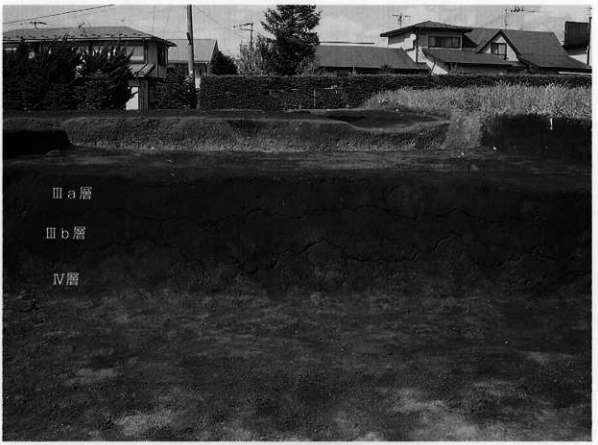
ＲＤ００１土坑

ＲＤ００２土坑

ＲＤ００３土坑

ＲＤ００４土坑

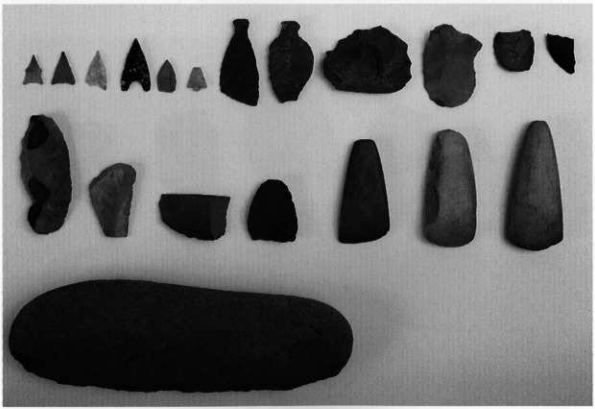
ＲＤ００５土坑



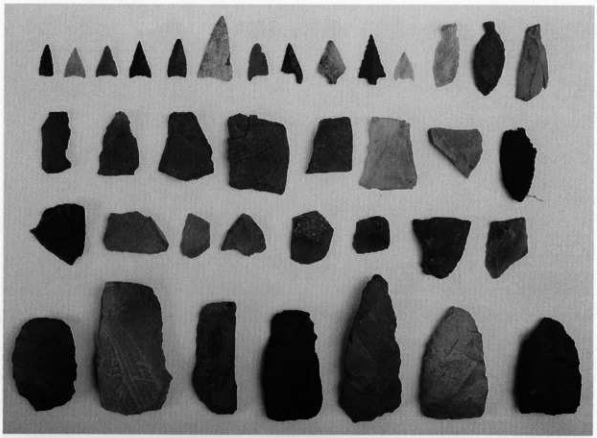
遺物包含層断面

遺物包含層出土土器（１）

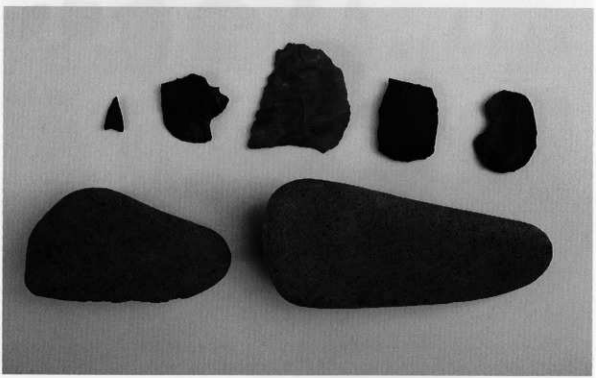
遺物包含層出土土器（2）



遺物包含層出土石器（1）



遺物包含層出土石器（２）・（３）



遺物包含層出土石器（４）

報告書抄録

ふりがな	みたけいせき
書名	みたけ遺跡
副書名	宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書
編著者名	佐々木亮二
編集機関	盛岡市遺跡の学び館
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1　TEL 019-635-6600
発行年月日	2008年12月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺構番号	北緯	東緯	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みたけ遺跡	岩手県盛岡市 みたけ地内	3201		39° 42′ 28″	141° 11′ 13″	第1次 2008.04.14 ～ 2008.06.05	2,300	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
みたけ遺跡	集落跡	縄文時代	土坑　5 (陥し穴状土坑)	縄文早期～前期 初頭土器・石器	

みたけ遺跡

―宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書―

2008年　12月26日　発行

編　集　盛岡市遺跡の学び館　〒020-0866　盛岡市本宮字荒屋13番地1
TEL 019－635－6600

発　行　観武ヶ原開拓農協組合　盛岡市教育委員会

印　刷　株式会社　杜陵印刷　〒020-0122　盛岡市みたけ2丁目22－50
TEL 019－641－8000